
ルーンファイターズ

大蛇真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーンファイターズ

【Zコード】

Z7180P

【作者名】

大蛇真琴

【あらすじ】

連載小説：。闘技場の中で繰り広げられる、華麗な美技。
魔法と武術を織り交ぜた。誰も見たことのない連載ファンタジー！

重力と電磁波

ルーンファイターズ

～魔術と武術のオーケストラ～

聖夜の明かりをともした、闘技場。

そこで、一夜限りのコロシアムが開かれる。
自らの魔術と武術を、磨くため…披露するため。

この世界の発展を願つて、戦士たちは、戦いへと出向くのだった。

切り裂きジャックVS高速のレイラ

張り詰めた空氣の中、ゴングがなる。

ジャックは、ナイフを投げ、2・3本、女武道士の眼前へと迫る。
それを、ひらりとよける。

「甘いな、女」

それに気づいたレイラは、ほんの一瞬に勘で避ける。
闘技場の床を貫く、一本のナイフ。それは、10cmの穴を作り上げていた。

「そのナイフ、ただのナイフじゃなさうね?..」

ジャックは、否定する。

レイラは、ナイフを拾い上げ…。そして、ニヤリと笑った。

「タネがばれたわ」

レイラは、ジャックに向かつてナイフを高速で投げる。
しかし、無常にもナイフは床に落ちる。

「私のレールガンを叩き落すとしたら、魔術の属性は一つ」
ジャックは、高笑いをし、「名答とうなづいた」。

「そう、俺の魔術は、重力変化…。よく見抜いたな?..」

距離をとり、互いに高速の武術を見せる。

レイラは、力強く。ジャックは軽やかに…。

ただ、ナイフが床に散らばるだけ…。

ナイフが数本に達したとき…。

ナイフが意思を持ったよう、「てりやき」持ち主のところに刃を向かわせていく。

それが、体を抉り、そして、試合は、終了した。

「貴方のナイフに、電磁波を付けさせてもらった。

何度か拳をまじわえたのは、貴方を標的とする磁場の中心を作ることため。

残念だけど、私の拳に触れさせずに倒す方法を思いつるのが得策だつたのよ

ジャックは、血を流しながら…、その答えに満足げの笑みを浮かべた。

言葉の螺旋VS自在鉄球の使い手

言葉の螺旋 アッシュ VS 鉄球のジャグラーラー クラウン
「お前、言葉で人を殺めるそつじやねえか？」

アッシュは笑う。

「ええ、それが何か？」

鉄球を回しながら、軽く一撃を与える。

「止まれ」

寸前で鉄球が止まる。

クラウンは、驚く。今まで、このように逆らつた覚えはないからだ。

「意思生物の鉄球。お前は、ビーストティマーか？」

クラウンは、この男の言つてる意味がよく分からなかつた。瞬時に見抜く洞察力。何もかも知つてそうな、理の眼。

「ところでよ？どうやって、俺を殺すんだい？」

アッシュは唱えた。

「 - - - 」

その瞬間、殺気がした。それは、鉄球からだ。

「私の僕へと書き換えた。私はルールを改变する物。それは、言葉の螺旋。理とは、こういう風に使うものだよ？」

鉄球が荒れ狂い、クラウンを殴り続ける。

内臓が豪快に碎け散る音が鈍く響いていた。

気づいたら、試合は終わり、理を示したアッシュも、死体をじっと見つめ、黙り込んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7180p/>

ルーンファイターズ

2010年12月31日03時40分発行